

(別紙様式第3号)

論文要旨

論文題目

Association Study of Dental Caries and Jaw Development in Patients

with Unilateral Cleft Lip and Palate

(齲歯と顎発育の関連性について)

氏名 米海英 

[目 的] 唇 頸 口 蓋 裂 患 者 は , 齒 列 不 正 な ど
が 原 因 と な り , 齢 蝕 に 罹 患 す る 割 合 が 比 較 的
高 い こ と が 示 喆 さ れ て き た 。 今 回 わ れ わ れ
は , 唇 頸 口 蓋 裂 患 者 に お い て 齢 蝏 と 頸 発 育 と
の 関 連 性 を 調 べ る こ と を 目 的 と し 検 討 を お こ
な つ た 。
[対 象] 資 料 と し て は 琉 球 大 学 医 学 部 附 属
病 院 歯 科 口 腔 外 科 を 受 診 し , 繼 続 し て 一 貫 治
療 を 行 つ た II A 期 の 片 側 性 唇 頸 口 蓋 裂 患 者 66
名 と 健 常 児 10 名 と し た 。 唇 頸 口 蓋 裂 患 者 の
う ち , 口 蓋 形 成 術 後 早 期 よ り 口 蓋 床 を 使 用 し ,
早 期 に 咬 合 誘 導 を 開 始 し た 27 例 を 咬 合 管 理 群 ,
そ れ 以 外 の 39 例 を 非 咬 合 管 理 群 と し , 上 下 頸
の 石 膏 模 型 を 用 い て 比 較 検 討 を 行 つ た 。
[結 果] (1) 齢 蝏 罹 患 率 と 一 人 平 均 齢 蝏 齒 数
で は , 咬 合 管 理 群 は 齢 蝏 あ り 17 例 (62.96%) で 非 咬
合 管 理 群 齢 蝏 あ り 28 例 (71.79%) で あ つ た 。 一 人
平 均 齢 蝏 齒 数 に お い て 咬 合 管 理 群 は 2.30 本 で 非
咬 合 管 理 群 は 4.44 本 で あ つ た 。
(2) 咬 合 管 理 群 と 非 咬 合 管 理 群 に お け る 齢 蝏 罹

*要旨は3枚(1200字以内)にまとめること。

20×20

患の程度による顎発育の様相をみると上下顎																			
の幅径と長径の計測値には差が認められなか																			
つた。																			
(3) 咬合管理群における重度齲蝕群と軽度齲蝕																			
群における上顎は、非対称性を示していた。																			
一方で、齲蝕無し群は対称性を呈していた。																			
非咬合管理群では3群とも上顎が非対称性であ																			
あつた。																			
(4) 咬合管理群と非咬合管理群が舌房容積には																			
類似の計測値を示した。健常児に比較すると、																			
両群とも有意に小さい値を示した																			
(5) 重度齲蝕群の正中線の偏位率は76.9%であり、																			
軽度齲蝕群は57.9%であつた。さらに齲蝕無																			
し群が52.3%であり、健常児は20%であつた。																			
(6) 前歯部に重度齲蝕を有する症例は軽度齲蝕																			
群と齲蝕無し群より顎裂部の角度が有意に大きかつた。																			
[結語] 今回の研究から、唇顎口蓋裂患者																			
において、齲蝕と顎発育には関連性がある可																			
能性が考えられた。																			

*要旨は3枚(1200字以内)にまとめること。

20×20

平成24年7月10日

(別紙様式第7号)

論文審査結果の要旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	朱 海英
論文審査委員	審査日	平成24年7月9日	
	主査教授	金谷文剛	印
	副査教授	鈴木卓男	印
	副査教授	宮崎哲次	印

(論文題目)

Association Study of Dental Caries and Jaw Development
in Patients with Unilateral Cleft Lip and Palate
(片側性唇顎口蓋裂患者のう蝕と顎発育の関連性について)

(論文審査結果の要旨)

上記論文に関して、研究にいたる背景と目的、研究内容、および研究成果の意義と学術的水準について慎重に検討し、以下のような審査結果を得た。

1. 研究の背景と目的

唇顎口蓋裂患児は、先天的な顎顔面頭蓋の形態異常とともに口唇や口蓋形成術などの外科的侵襲による術後の成長抑制を始めとする様々な要因により形態的、機能的異常を伴っている。また、口唇口蓋裂患者にう蝕の発生率が高いとする報告が多く見られるが、顎発育に及ぼす影響に関する報告は少ない。今回、唇顎口蓋裂患者のう蝕と顎発育との関連性について本研究を行った。

2. 研究内容

研究対象は琉球大学医学部附属病院歯科口腔外科を受診し、継続して一貫治療が行われている乳歯列期(IIA期)の上下顎模型が十分評価可能であった片側性唇顎口蓋裂患児66名とし、これらの対象の中、咬合管理を行った群(以下咬合管理群)27例、咬合管理を行わなかった群(以下非咬合管理群)39例に分類した。う蝕の顎発育に対する影響を検討するため、軽度う蝕群(C1~C2)、重度う蝕群(C3~C4)、う蝕無し群に分類した。対照として、同時期の健常児10名の上下顎模型を用いた。結果: II A期において片側性唇顎口蓋裂患児の歯列弓の幅径、長径、舌房容積にはう蝕との関連性が認められなかった。しかし、歯列弓の対称性にはう蝕の影響が認められた。さらに顎裂部付近の成長発育に影響があることが示唆され、特に垂直方向への顎発育抑制が強かった。

以上より、片側性唇顎口蓋裂患児において、う蝕が顎発育に関与している可能性が明らかになり、一貫治療におけるう蝕管理の重要性が示唆された。

3. 研究成果の意義と学術的水準

う蝕と顎発育の関連性について本研究を行った。過去の報告では、片側性唇顎口蓋裂患児の

う歯罹患率が高いなど口腔衛生的な面では報告されているが、う歯が顎発育に及ぼす影響についての報告がほとんど認められない。今回の研究結果によりう歯が顎発育に関与していることを明らかにしたことは大変意義深いと考えられる。

以上により、本論文は学位授与に十分値するものであると判断した。

備 考 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書きとすること。

2 要旨は800字～1200字以内にまとめること。

3 *印は記入しないこと。